



Data

監督: グザビエ・ルグラン
 出演: レア・ドリュッケール/ドゥ
 ニ・メノーシェ/トーマス・
 ジョリア/マティルド・オネ
 ヴ/マチュー・サイカリ/フ
 ロランス・ジャナス/サディ
 ア・ペンタイエブ/ソフィ
 ー・パンスマイユ/エミリ
 ー・アンセルティ=フォルメ
 ンティニ

👁️👁️ みどころ

「プリプリ」の美しいバラード曲「ジュリアン」は、ラブレターを書くつもりで作詞されたようだ。しかし、本作に見る11歳の男の子ジュリアンは、両親の離婚、親権者の指定、父親との面会交流の中、なぜ嘘を重ねていくことに・・・？

DV（ドメスティックバイオレンス）は近時日本でも注目されており、離婚調停を担当する弁護士も“注意事項”だが、本作に見る父親のDV性は？見るからに凶暴な男なら最初からそれを予防できるが、隠されたDV性が少しずつ現実になってくると、その対応は難しい。

しかして、本作ラストでは？これでは警察沙汰はやむを得ないが、さあ本作のクライマックスにみるDVぶりをあなたはどう解釈？石原慎太郎の処女作『太陽の季節』で読んだ“あのくだり”と対比してみるのも、一興だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ 「ジュリアン」と聞くと？本作のジュリアンは？■□

バブル突入前後の1980年代後半から90年代にかけて大ヒットしたのが、女性バンドの「プリンセス・プリンセス」。私はその代表的バラード曲である「M」が大好きで新地の飲み屋でいつも歌っていたが、当時もっとも人気があったのはやはり「Diamonds（ダイヤモンド）」と「世界でいちばん熱い夏」の2曲だ。今でも私は「プリプリ」のアルバムをipodに収録して出張時にいつも聴いているが、その中の1曲に「ジュリアン」がある。「ジュリアン」という呼びかけから始まる、「プリプリ」初のバラード曲である同曲は、ギターの中山加奈子がラブレターを書くようなつもりで作詞した美しい曲だが、本作

の邦題になっている「ジュリアン」とはナニ？それは、現在家庭裁判所の離婚調停で争っている父親アントワーヌ・ベッソン（ドゥニ・メノーシェ）と母親ミリアム・ベッソン（レア・ドリュッケール）間の長男（11歳）の名前だ。

昔のフランス映画の名作『禁じられた遊び』（52年）では、男女2人の子役が主役として登場し世界中の人々を泣かせた。本作でも、ジュリアンを演じる子役の俳優トーマス・ジオリアは本作がデビュー作だが、1度見たら忘れられない美少年だ。チラシによると、本作は第74回ヴェネチア国際映画祭監督賞を授賞した他、「世界35か国で公開され絶賛の嵐、フランスでは40万人のヒットになった傑作サスペンス」らしい。また、そこには「ジュリアンは母親を守るため、必死で嘘をつく」と書かれており、ジュリアンの苦悩に満ちた表情の顔がアップで載っている。しかし、本作はどんな映画？そして、ジュリアンはどんな少年？

■□離婚調停のテーマは親権と面会交流！■□

冒頭の、アントワーヌとミリアム双方の弁護士が、本人同席の中で裁判官に対して熱弁を奮う姿は迫力がある。もっとも、これは、私が日本で見えてきた離婚調停の風景とは全然違うものだ。そこでの双方弁護士の陳述を聞くと、本作では、18歳の長女ジョゼフィーヌ（マティルド・オネヴ）に養育費が発生しないことは争いが無い。妻への慰謝料と11歳の息子ジュリアンの養育費についても争いはなく、争点はおそらくジュリアンの親権者と父親の面会交流のやり方らしい。現在のゴーン裁判の保釈を巡る裁判を見てもわかるように、“人権の国”フランスと“??の国”日本では、離婚制度を巡っても大きな違いがある。そのためか、調停の席で父親を徹底的に嫌っている内容のジュリアンの陳述書が調停官の口から朗読されたものの、アントワーヌには共同親権が認められ、また、2週間に1度、週末の宿泊付きの面会が認められたから、アントワーヌはやれやれ。

ちなみに、私も5年間争っていた離婚事件が昨年未だに解決し、今後は父親と2人の息子との面会交流が問題なく進むことを見守る立場になったところだ。そんな偶然もあって、やっと離婚調停が成立した父親アントワーヌと息子ジュリアンとの今後の面会交流のあり方に注目していると・・・。

■□どちらが違約？面会交流の実施は難しい！■□

日本でも民法改正によって成年年齢が20歳から18歳に変わるが、人権の国フランスのそれは昔から18歳。したがって、18歳の長女ジョゼフィーヌは大人だから、両親の離婚の影響は受けないはずだ。ところが、アントワーヌはジョゼフィーヌの恋人サミュエル（マチュー・サイカリ）がジョゼフィーヌの学校をサボらせてデートしていることが気に入らないようで、何やかやと介入。ジョゼフィーヌがそれを嫌がったのは当然だ。また、ミリアムは夫と別居している間は実家で暮らしていたが、離婚が決まると再開地区に親

子3人で暮らすアパートを探していた。他方、アントワヌの方も離婚が決まったことでジュリアンとの面会交流をやりやすくするため、自宅をジュリアンの近くに引っ越すことを決めたい。そんな中、離婚調停後最初の面会交流は？引っ越しがまだ終わっていないアントワヌは、ジュリアンを両親の家に連れて行くつもりでミリアムの実家まで迎えに行き、クラクションを鳴らしたが・・・。

本作を観ていると、いくら明確に調停条項を定めてもそれは所詮基本枠だけだから、現場で起きる些細なトラブルにすべて対応できるものではないことがよくわかる。つまり、そこで起きた最初の些細なトラブルは、ジュリアンが「体調が悪いから」と言って面会を中止しようとしたこと。そこで、アントワヌはインターフォン越しにミリアムにそれを確認すると、ミリアムの主張は当然同じだったから、アントワヌが「それなら医師の診断書を見せろ！」と迫ったのは仕方ない。また、「ちょっと話を聞きたいから顔を出せ！」と迫ったのも仕方ない。さらに、ミリアムがそれを拒否すると、アントワヌは「取り決めを守らないなら訴える」と怒鳴ったため、仕方なくジュリアンはアントワヌの車に乗り込み、アントワヌの実家でいっしょに食事をしたが、ジュリアンの顔は浮かないままだ。また、面会交流を終えたジュリアンをミリアムの実家に送り届けた際、アントワヌがジュリアンに「ミリアムと話をさせてくれ」と言っても、ジュリアンは「母は今いない」と言い張るだけだった。さらに、ミリアムの連絡先を聞いても、ジュリアンはミリアムの個人の携帯ではなく実家の電話番号だけしか教えなかった。

そんな状況を考えると、この時点から、既にジュリアンの“母親を守るための必死の嘘つき作戦”を開始しているの？また、アントワヌとミリアムのどちらが調停条項に違約しているの？

■□■離婚後のアパートはどこ？なぜそれを追及するの？■□■

アントワヌはかなりの大男だし、それなりの資産も持っているはずだが、乗っている車は意外に小さい。ルノー車かどうかは知らないが、せいぜいニッサンの人気NO1の車「ノート」クラスだから、これを見るとフランス人の生活はかなり慎ましやかなことがわかる。また、最初のジュリアンとの面会交流の時間を過ごしたのはアントワヌの両親の家だが、そこでの食事はアントワヌの母親の手作りだから、これも慎ましい。さらに、ミリアムが新たに子供達と暮らすために探し決定したアパートは再開発地区にあるそうだが、その広さは80㎡くらいだから親子3人で暮らすには日本と同じレベルで、これも慎ましい。本作では、そんなフランス人の日常生活ぶりもしっかり鑑賞したい。

他方、本作中盤はジュリアンがジョゼフィーヌといっしょに再開発地区を歩いているのを見たという話を聞いたアントワヌが、直感的にそれがミリアムの新しいアパートに違いないと理解したため、しつこくジュリアンにその場所を問い詰めるシークエンスになる。しかし、なぜアントワヌはそれを追及するの？

■□■嘘の拡大に注目！それに伴って父親のDVも拡大！■□■

ジュリアンの嘘が拡大していくのに伴って、アントワヌのDVも正比例するかの如く拡大していくので、それに注目！ちなみに、日本でDV（ドメスティック・バイオレンス）という言葉が定着したのは平成の中頃からだが、ジュリアンの陳述書を聞くとアントワヌのDVは相当なものらしい。アントワヌとミリアムの離婚原因も“家庭内暴力”だし、娘のジョゼフィーヌにも暴力を奮ったことがあるため、ジョゼフィーヌもジュリアンと同じように父親を嫌っていた。もっとも、調停の席や食事をしている時のアントワヌにそんなDVは全く感じられず、むしろ優しさを感じるぐらいだが、本作中盤以降に少しずつ時々見せてくるアントワヌのDVはかなり酷い。ある時はジュリアンを助手席に乗せた状況下で、ある時は両親といっしょに楽しく過ごすはずの食事の席で、そしてまた、ミリアムと電話で話す時はいつも烈火の如く怒り狂い、怒鳴りまくることに……。

日本では今、道路拡幅事業のための地権者との話し合いが全く進展しないことに立腹した泉房徳明石市長が部下に対して見せた「火つけて捕まってこい！」等のヤクザまがいのパワハラ言動が話題を呼んでいるが、スクリーン上で見るアントワヌのDVぶりは録音テープで聞く泉市長の言動と同じようなものだ。1度は、ミリアムのアパートの所在について嘘をつき、咄嗟の隙に車から逃げ出したジュリアンだが、結局は車の中に戻され、ホンモノのアパートまで強制的に道案内させられることに……。

中盤のスクリーン上に見るアントワヌのDVぶりは相当なものだから、弁護士がこれを知れば抑えるべきが当然だが、ひょっとしてフランスの弁護士は離婚調停事件が終わればもう“お役御免”と考えているの？それはともかく、こんな風にアントワヌのDVがエスカレートしていく中、以前からジュリアンやミリアムたちが楽しみにしていたジョゼフィーヌの誕生パーティの実施は？もしそこにアントワヌが登場（乱入？）してくれば、大変なことになるのでは？

■□■18歳での妊娠の是非は？父親の心配は無用？■□■

成人年齢は20歳が妥当？それとも18歳が妥当？授業をサボって恋人のサミュエルとのデートにうつつをぬかしているジョゼフィーヌの姿を見ると、ちょっと心配。さすがに母親も「卒業はしっかりしてね」とアドバイスしていたが……。また、濃厚なキス(?)を交わしているシーンを見ていると、男親なら特に、ひょっとして肉体関係は？妊娠は？と心配するのも当然。その結果、アントワヌの場合には娘に対して暴力的な行動になるらしいが、それは絶対にダメだ。

しかし、本作中盤に少しだけ見せてくれる、女子トイレのシークエンスは一体何を物語っているの？この描写は邦画では絶対考えられない抽象的なつくり方だが「これぞモンタージュ理論！（複数の映像を繋ぎ合わせることで新しい意味が現れるとする理論）」とばか

りに展開するこのシークエンスは面白い。もっとも、これも今ドキは妊娠しているか否かの検査はトイレで尿検査をすれば容易に判明することを知っていることが前提だが、その結果にはジョゼフィーヌもびっくり！すると、もしこれをアントワヌが知ったら・・・。

そんな心配をよそに、ジョゼフィーヌの18歳の誕生日パーティーはかなり豪華なものだ。ジョゼフィーヌの恋人はバンドのヴォーカルもやっているらしく、舞台にはそのバンドが登場し、ジョゼフィーヌにもわか歌手デビューすることに。さらに、サミュエルとのデュエットもバッチリだ。そんなお楽しみの場にアントワヌが乱入(?)しなかったのは幸いだったが、会場の外にはアントワヌの姿が。そこで、アントワヌはジュリアンに対して「俺はまだ妻も子供たちのことも愛しているんだ」と懸命のアピール。これにはさすがの私も「一体、お前は今頃何を言っているんだ」とあきれてしまったが・・・。

■□■驚愕のラストをどう解釈？賛否両論は必至！■□■

後半からラストにかけての、ジュリアンを前にしてアントワヌと父親との口論や、ミリアムとアントワヌの激しい罵り合いを聞いていると、それまで隠されていたアントワヌの凶暴性が明らかになってくる。しかして、本作ラストのクライマックスでは、ミリアムとジュリアンが住んでいる転居先のアパートでアントワヌのDVが炸裂するので、それに注目！

石原慎太郎の処女小説『太陽の季節』が「第34回(1955年下半期)芥川賞」を受賞したのは1956年のこと。そこでは、勃起した男性のシンボルで障子を突き破るくだりが大きな話題を呼んだが、そんなことで女を自分に注目させることの是非は？本作ラストのクライマックスでは、ミリアムの新しいアパートをアントワヌが訪れ、「話がしたい。ドアを開けろ」と言いながら、ドアを強烈に叩き始めたから、ジョゼフィーヌの誕生日パーティーの後このアパートに帰っていたミリアムとジュリアンが怯えてしまったのは当然。隣人のおばさんが警察に通報してくれたから、ミリアムは警察官の電話での誘導に従って、鍵をかけた浴室の中に隠れたが、ミリアムが玄関のドアを開けないとわかると、なんとアントワヌは持参した猟銃をドアにぶっ放し始めたから大変。コトがここまでになると、アントワヌの襲撃が先？それとも警察官の到着が先？という恐ろしい事態に。

グザビエ・ルグラン監督の本作の作り方は斬新で、そのため前記の賞を受賞したわけだが、さすがにこのクライマックスは少し現実離れしている。つまり、いくら凶暴なアントワヌでも、ここまでのバイオレンスはありえないのでは？そう思うわけだ。しかし、このクライマックスは映画としての問題提起としては十分だから、こりゃ石原慎太郎のデビュー当時の問題提起と同じように賛否両論は必至！

2018(平成30)年2月5日記